

## メディアや SNS における遺体 ―アジアを中心に

小谷 みどり

### 1. はじめに

筆者が死生学の研究を始めて 30 年以上が経過する。この間、ずっと疑問に思っていたテーマの一つが、「日本のメディアはなぜ遺体の写真を掲載しないのか」であった。死者の人権を守るべき、あるいは遺体写真を見る人が PTSD になる可能性がある、などの理由は想像できるが、諸外国では、報道の一環として遺体の写真を目にすることが当たり前にある。

そこで本稿では、まず筆者がなぜこのテーマに関心を持っているのか、自分の経験について述べたい。

### 2. タイの事例

筆者が最初に、メディアで遺体の写真を目にしたのは、1991 年のタイ・バンコクであった。日本政府の派遣で東南アジア各国に滞在していた筆者は、バンコクで現地の方の家にホームステイしていた。家族で夕食を取りながら、タイ語で流れてくるテレビを見ていた時、自動車同士が衝突した交通事故のニュースが流れた。そのなかで、原型をとどめないほど壊れた自動車の映像の後に、被害者と思われる人の遺体が映されたのだ。筆者は本当にびっくりしたが、タイ人の家族は平然とそのニュースを見ていたことにも驚いた。一家団欒の時間に、悲惨な遺体の映像が流れたことに筆者はカルチャーショックを受け、「タイのニュースでは、事故や事件の被害者の遺体映像が流されるのは一般的なのか」と家族に聞いたほどだ。筆者はタイ語を話せないので、事故の内容を理解することができなかったが、もしかすると、報道された被害者はタレントか政治家なのか、とさえ思った。しかしホームステイ先のタイ人の家族は、「なぜそんなことを疑問に思うのか」が分からないといった風に、「自動車事故で人が亡くなったんですって」とだけ、答えてくれた。

それから 30 年以上の間、何度もタイへ渡航する間に、幾度となく遺体の写真や映像を目にする機会があった。

そのひとつは、雑誌だ。街中の屋台で食事をしたとき、隣に座った中年男性たちが雑誌を見ながら盛り上がっていたので、その雑誌を見せてもらい、筆者も同じ雑誌をキオスクで購入した。それが写真 1 だ。『クライムニュース』という名前の雑誌で、事件で亡くなった人の生前写真や遺体写真、事件現場の写真とともに、人となりや事件について詳細に報じられている。事件に巻き込まれた遺体は損傷が激しかったり、出血していたりするものばかりだ。興味深いことに、この雑誌には女性のセミヌード、はたまたピストルの広告まで出ており、性と死、暴力をテーマとした雑誌であることが分かる。



写真1 『クライムニュース』の表表紙（右）と裏表紙（左）



写真2 雑誌の中身

殺人事件については日本でも、被害者や加害者どちらの素性や人となり詳細に報道され、卒業アルバムから切り取った若い頃の写真が掲載されるが、遺体の写真や事件現場の凄惨な写真が公開されることは皆無だ。

タイではそもそも、他人の遺体が目に触れる機会は日常のなかにある。東南アジア最大級の広さを誇るシリラート病院の敷地に、シリラート医学博物館（Siriraj Medical Museum）がある。医学教育に寄与するために 100 年以上前に設立されており、医学生だけでなく、一般にも公開されており、社会科見学で訪れる現地の中高生も多い。

この博物館は3つの博物館から構成されており、そのひとつ、法医学博物館（Songkran Niyomsan Forensic Medicine Musuem）には、犯罪や事故で亡くなり、法医学の鑑定が必要だった遺体が展示されている。この博物館は別名「Si Quey（シーウィ）博物館」とも呼ばれており、1950年代に数年間で5人の幼児を殺害し、不老長寿のために被害者の臓器を食べたという凶悪犯罪者シーウィのミイラ化された遺体を陳列していたことに起因する。シーウィは1959年に死刑に処されたが、裁判所は「供養する価値はない」とし、永久に全裸をさらし者にする決定を下した。筆者が訪問した時には、黒光りするシーウィの遺体はガラスケースに寄りかかるように斜めに立っており、60年以上も陳列されているならば、重さでガラスを割って飛び出してくるのではないかと、ぞっとした覚えがある。

シーウィの遺体以外にも、死刑になったレイプ犯罪者の遺体、拳銃で撃ち抜かれた頭部の断面、列車事故やバイク事故で頭部と胴体が切断された遺体、自死遺体など、ホルマリンに浸かった臓器や写真などが陳列されている。法医学博物館は犯罪の重大性や事故の凄惨さを示すための教育目的で展示しているという触れ込みだが、日本人からすれば、倫理的に許される展示なのか、疑問を持つ人は多いだろう。

ちなみにシーウィ事件については、2019年にテレビ番組で事件の検証が行われ、えん罪説が浮上したことをきっかけに、法学部の学生が展示の取り下げを求めて署名活動をはじめた。シーウィが生前に住んでいた地域の有志も人権委員会に名誉の回復を直訴したこともあり、シリラート病院はシーウィの遺体については展示を取りやめた。遺体の引受人を探したものの、見つけれなかったため、2020年に遺体は茶毘に付され、裁判所やシリラート病院の関係者が立ち合ったという。

ちなみにシリラート病院には、行き倒れや自死などいわゆる異状死で、身元が判明しない遺体の情報が、発見時の状況写真、顔のアップなどの写真とともに、誰でも見られる状態で廊下に掲示されている。行方不明になった人が亡くなっているのではないかと、家族や親しい人たちが探しにくることもあるというが、多くの遺体写真は凄惨で、写真をもても本人だと判別できるだろうかと、筆者は疑問に思う。

教育のために遺体を展示するという発想は、シリラート病院に限った話ではない。ロブリー県にあるプラバートナンプー寺院は、1992年からHIV感染者やエイズ患者、その家族を受け入れているが、敷地内に博物館があり、そこにはエイズで亡くなった患者の遺体、臓器などが陳列されている。筆者は2000年頃から数年間で何度も訪問したが、毎回、見学に来る若者が多かったことが印象に残っている。

博物館に陳列されている患者の全裸遺体は、たいがいとてもやせており、なかには豊胸手術の後が残る遺体も少なくなかった。とはいえ、手だけ、足だけがホルマリン漬けになっている展示、骨格標本になった展示もあり、エイズで亡くなろうが、他の病気で亡くなろうが、特徴的な違いがない展示も多い。この博物館は、エイズの恐ろしさ、HIV感染予防の大切さを啓発することを目的としているというが、果たして、その教育的意義はあるのか、理解できなかった。ただし、シリラート病院の博物館と異なり、ここでは生前の

患者の意思に応じて陳列されている。2000 年頃に筆者は、死後に遺体を陳列されたいと希望している患者にヒアリングをしたことがある。その女性は、「私のようにエイズで命を落とさないよう、世の中の人に伝えることで徳を積みたい」と答えてくれた。



写真3 プラバートナンプー寺院の博物館の入口（2000 年頃、筆者撮影）



写真4 防腐処置された患者の遺体（2000 年頃、筆者撮影）



写真5 患者の骨格標本も。(2000年頃、筆者撮影)

### 3. カンボジアの事例

筆者がカンボジアを頻繁に訪問するようになったのは2019年以降である。現地のの人たちと親しくなるにつれ、SNS に遺体の写真をアップする人が多いことに気づいた。身内や親友が、遺体の写真を SNS にアップするのは極めて一般的で、筆者は電車の中など人前で SNS を見ることはできない。遺体の写真が流れてくるのが珍しくないからだ。

カンボジアでは、葬儀の祭壇横に本人の顔写真のお面と生前の衣装をつけた人形を置くことが多く、遺体の写真でなくても、本人をイメージした人形の写真を見ると、ぎょっとする。筆者の親友の友人が自動車事故で亡くなり、友人たちが故人の追悼ビデオを製作したことがあった。筆者の親友はそれを SNS でリツイートしたので、興味本位でビデオを見たところ、腰を抜かすほど驚いた。生前の素敵な写真が音楽とともに流されたが、最後は衝突して破壊された自動車の写真、そして、元気な時の顔とはまったく異なる、損傷の激しい遺体の顔で終わっていた。こうした写真を追悼ビデオで使うことも、それを広く流すことも、日本人からすると、理解しがたい感覚だが、カンボジアでは違和感のないことなのだろう。



写真6 身内が亡くなった友人が SNS にアップした写真



写真7 2024 年、軍施設で起きた爆発事故で亡くなった兵士の合同葬  
(SNS にアップされた新聞記事の写真を、いろいろな人がリツイートしている)

#### 4. まとめ

本稿では、タイやカンボジアでの筆者の体験を紹介したが、他の国でも、メディアを通じて遺体の映像や写真を目にする機会は少なくない。2024年5月に筆者はフィリピン・マニラを訪問した。現地の友人が読んでいた新聞紙に、射殺事件のニュースが、殺された被害者の写真とともに掲載されていた。



写真8 The Philippine Star紙 2024年5月4日

諸外国では、世界で起きている戦争や災害で亡くなった人の遺体の映像や写真が報道されている。今や、日本にいながら、世界のニュースにアクセスすることができる時代になって、こうした映像や写真を見ることは容易だ。

一方、日本では、なぜこうした映像や写真がタブーとされているのだろうか。そのことについて、次年度の考察課題としたい。